

目次 _____ CONTENTS

2007年(第6回)年次大会について

大会委員長からの挨拶	_____	2
大会発表募集要項	_____	3
大会概要(プログラム予定)	_____	4
新理事の挨拶	_____	5
「私の提言」第5回	_____	7
地区研究会報告 北海道・東北	_____ 7	関東_____ 9
		関西_____ 10
		九州_____ 11
地区研究会案内	_____	12
お知らせ 学会誌第3号発刊について	_____ 13	多文化関係学会ホームページについて_____ 13
理事・監事選挙報告	_____ 14	新会員募集案内_____ 14
2006年度第3回理事会議事録	_____	14
事務局より 学会活動参加の手引き	_____	16
編集部より	_____	16

2007年度年次大会について

【開催日】10月27日(土)および28日(日)

【会場】兵庫県立大学 神戸学園都市キャンパス

大会テーマ：

サステナブル(持続可能)な関係の構築に向けて

Constructing Relations for a Sustainable Earth



ただ今研究発表を募集中です。ふるってご応募下さい。

(発表募集要項はp.3をご参照下さい)

締め切りは7月6日(金)です。

大会委員長挨拶

多文化関係学会 第6回年次大会に向けて

松田陽子（兵庫県立大学）

多文化関係学会(JSMR: Japan Society for Multicultural Relations)の第6回年次大会は、来る10月27日(土) 28(日)に兵庫県立大学神戸学園都市キャンパスで開催されます。また、大会前日の26日(金)午後には、プレカンファランス・ワークショップがNPOたかとりコミュニティセンターにて実施されます。

「サステナブル(持続可能)な関係の構築に向けて」というテーマのもと、グローバル化によってますます緊密な関係構築が必要になっている世界の諸地域や国内における多様な文化背景を持つ人々との関係について、場当たりの、一時的な関係づくりでなく、持続可能で、強固なものにしていくには、どのような視点や考え方を持って取り組んでいくべきかを考える機会としたいと思います。会員の日頃の研究成果を発表していただき、互いの意見交換の場として、さらに、今後の研究の進展へのエネルギーを分かち合う場となることを期待しております。

大会第1日目の招聘講演には、韓国研究を中心とした新進気鋭の研究者である小倉紀蔵氏(京都大学)をお招きします。「東アジアにおける多文化共生の時代へ—マルチサブジェクティビズム(多重主体主義)の視点から」と題するこの講演では、東アジアのサステナブルな関係構築に向け、新たな視点を取り入れてお話しいただく予定です。また、パネルディスカッションでは、「文化の関係性をめぐるアイデンティティ再考」というテーマで、日常化された「アイデンティティ」という用語を再考し、多文化共生社会構築の問題としての新たな問いかけや、研究に必要な視点の明確化について考えます。第2日目はオープンフォーラム「食のせめぎ合いと多文化関係」を開催し、食および食文化の基本的位置づけを試みたあと、食に関する多文化間の葛藤にかかわる問題を検討します。捕鯨やマグロ問題などを文化にかかわる視点から、サステナブルな関係構築の課題の一つとして討論します。また、大会前日のプレカンファランス・ワークショップでは、「ケーススタディによる多文化社会研究—多様なマイノリティの視点から」というテーマで、NPOの活動現場(神戸市長田区)を会場として参加型ワークショップを実施し、多様な文化を背景とする人々が共生するための具体的な課題に取り組みます。

神戸での大会開催は初めてですので、皆様にはぜひ神戸のさまざまな顔に触れる機会にもしていただきたいと考え、見どころの情報提供もしていく予定です。会場の神戸学園都市キャンパスは、神戸三宮から約35分の閑静な所にあります。秋に神戸でお会いできるのを楽しみにしております。奮ってご参加ください。

2007 年度年次大会・発表募集要項

【大会テーマ】

サステナブル（持続可能）な関係の構築に向けて Constructing Relations for a Sustainable Earth

1. 発表テーマ：本学会の趣旨に沿ったもので、未発表のものに限る。
2. 発表時間：30分（発表20分、質疑応答10分）
3. 申し込み締め切り：2007年7月6日（金）（消印有効）
4. 申し込み要領：A4サイズ用紙一枚に次のことを明記し、電子メール（送付）とハードコピー（郵送）を大会準備委員会宛に送ること。
 - （1）必要個人情報（氏名・所属・職責・専門分野・連絡先住所・電話・ファックス・電子メールアドレス）
 - （2）発表タイトル（できるだけサブタイトルも）
 - （3）発表概要（400字～600字）
 - （4）本学会の関連主要研究領域（社会・心理・言語・コミュニケーション・地域間研究）から1領域を明記すること。
5. 発表者の決定：発表申込書は大会委員会で審議し、採用となった発表者には7月13日ごろまでに電子メールまたはファックスで連絡する。
6. 抄録原稿の提出：発表予定者は8月20日（月）までに発表内容の抄録原稿を下記の宛先の大会委員長に送ること。A4サイズ2枚または4枚のいずれか。ワードで作成し、横40字、縦30行とする。文字の大きさは10.5～11ポイント、日本語の文字は平成明朝またはMS明朝、英語の文字はTimes New Romanを使う。提出は、電子メールによって添付書類で送付すると同時に、ハードコピーを大会準備委員会に郵送する。この要旨は、大会当日『第6回年次大会発表抄録集』として参加者に配布する。
7. 石井米雄奨励賞（学生研究発表奨励賞 1件2万円 5名以内）への応募方法、審査、発表については、発表決定者に詳細をお知らせいたします。抄録原稿提出時に申請書に記入の上送付してください。

大会準備委員会の宛先

住所：〒651-2197 神戸市西区学園西町8-2-1
兵庫県立大学経済学部 松田陽子研究室内 多文化関係学会・大会準備委員会

メールアドレス：<taikai@econ.u-hyogo.ac.jp>
ファックス：(078) 794-6166（松田研究室宛と明記）

2007 年度年次大会・概要

【大会テーマ】
サステナブル（持続可能）な関係の構築に向けて
Constructing Relations for a Sustainable Earth

10月26日（金）

プレカンファランス・ワークショップ.....13:30-16:30

「ケーススタディによる多文化社会研究—多様なマイノリティの視点から」

（吉富志津代氏、他） 場所：NPOたかとりコミュニティセンター 申込：先着順30名迄

10月27日（土）

研究発表1 10:00-12:15

招聘講演.....13:30-15:00

「東アジアにおける多文化共生の時代へ

—マルチサブジェクティブイズム（多重主体主義）の視点から」（小倉紀蔵氏）

パネルディスカッション.....15:15-17:15

「文化の関係性をめぐるアイデンティティ再考」

（パネリスト：渋谷真樹氏、李洙任氏、八島智子氏、コーディネーター：松田陽子氏）

音楽と懇親会.....17:30 -20:00

10月28日（日）

研究発表2 9:30-10:30

オープンフォーラム.....10:40-12:30

「食のせめぎ合いと多文化関係」

（パネリスト：岸本裕一氏、小林路義氏、高橋順一氏、コーディネーター：細川隆雄氏）

総会.....13:30-14:00

研究発表3 14:00-15:00

会場：兵庫県立大学神戸学園都市キャンパス (<http://www.u-hyogo.ac.jp/>)

・神戸市営地下鉄学園都市駅より徒歩約10分

・学園都市駅---新幹線では新神戸より神戸市営地下鉄で約26分

---神戸空港からはポートライナー、神戸市営地下鉄で学園都市駅まで約45分

○参加費：

早期申し込み（07年9月28日（金）までに振り込み）の場合

一般会員2500円、非学会員3500円、学生会員1000円、学生非会員1500円

上記期間以降・当日受付の場合

一般会員3000円、非学会員4000円、学生会員1500円、学生非会員2000円

プレカンファランス・ワークショップ

一般1500円、学生1000円

○懇親会費：一般会員4000円、学生会員2000円

○大会詳細・入会申し込みは学会ホームページへ：<http://www.js-mr.org/>

新理事の挨拶



磯崎京子（早稲田大学）

社会に出て最初の仕事はエール・フランス航空の国際線フライト・アテンダントでした。パリに在住して、フランス人クルー達と共に、灼熱の砂漠から極寒のアラスカ、資本主義国から社会主義国、富裕国から貧困国、と世界各地を廻っていました。フランスをはじめとする様々な土地でカルチャー・ショックを味わい、さらに日本に帰国してからは、第二カルチャー・ショックを味わいました。それらの経験から、人間に及ぼす文化の影響を痛感し、異文化コミュニケーションに興味を持つようになりました。

テンプル大学大学院でTESOLを、立教大学大学院で異文化コミュニケーションを学びました。関心を持っている分野は、異文化交流史、英語教育と異文化理解教育、そしてフェアトレードのボランティア活動をしています。未熟な者ですので、皆様の御指導とお力添えをいただきながら、多文化関係学会の発展に貢献していきたいと思っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

抱井尚子（青山学院大学）

この度、本学会の理事を承りました抱井でございます。私は医療コミュニケーションの視点から、「多文化共生」のあり方に関する研究をおこなっております。昨年度は1年間の在外研究期間をいただき、米国の「統合医療(integrative medicine)」の現場でフィールドワーク研究をおこなってまいりました。米国は、科学的・客観的・要素還元主義的パラダイムに立脚する西洋医療の中心地でもあります。そこでの統合医療の実践は、全人的・精神主義的世界観に立脚する非西洋医療と西洋医療とを統合することで、患者が身心共に自己回復していく過程をいかに支援できるのか、という問いに対する挑戦的な試みであると言えます。そして近年の米国の統合医療に関する論文では、caring、compassion、loveといった、これまでの西洋医療では排除されてきた、「人間性」を重視する単語が惜しみなく使われています。つまり、生物医学的アプローチから生物心理社会モデルを導入することで西洋医学をリードしてきた米国の医療従事者達が、そのさらなる発展段階として非西洋医療との間のシナジーを求めているということは、今まさに、医療の最先端においても「多文化共生」が求められている証拠であると言えます。そしてこのような状況の中で、本学会が真の意味での「多文化共生」を問い続けていることの意義は、日本のみならず世界全体においても今後ますます重要になっていくと考えます。このような大きな活動の中で、私自身ができることは大変限られておりますが、本学会を皆様と共に盛り上げて行けるよう努力させていただきたいと考えておりますので、ご指導・ご鞭撻をよろしくお願い致します。

久保田真弓（関西大学）

この度、理事を仰せつかり、広報委員長の任につくことになりました。何分にも不慣れな点が多々あると思いますが、何卒ご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

専門は、異文化理解、非言語コミュニケーションです。80年に青年海外協力隊に参加し、ガーナで数学を教えた経験から「文化とコミュニケーション」に関心があります。特に、発展途上国やジェンダーをも視野に入れた異文化コミュニケーション、言語と非言語の特性をもった「あいづち」、ICT（情報通信技術）を駆使した学校間の国際交流等について、学部生、大学院生とともに実践、研究しています。ゼミでは「異文化理解とコミュニケーションのあり方」をテーマにフィリピンなどへスタディツアーをおこなっています。ICTに頼る余り表情やコミュニケーション能力に乏しい若者に最近では危惧を抱いています。多様な背景を持つ人々に意識的に出会うことで、自己が練磨されると確信しています。著書に『「あいづち」は人を活かす 新しいコミュニケーションのすすめ』（廣済堂）、共訳書にキャロライン・モーザ著『ジェンダー・開発・NGO 私たち自身のエンパワーメント』（新評論）等があります。

清 ルミ（常葉学園大学）

この度、新理事として企画委員をつとめさせていただくことになりました清ルミと申します。所属は静岡にある常葉学園大学です。ほかに、経済産業省・EU委合同プログラムで、EUビジネスエグゼクティブ対象日本語文化研修の責任者を兼職いたしております。

関心領域は、国内における外国人と日本人の共生のあり方、日本人同士の異文化コミュニケーション、グローバルズムにおけるビジネスコミュニケーション、喪失しつつある伝統文化の見直しなどです。

もとより微力であり、地理的にみた印象とは裏腹にアクセスの悪い静岡の片田舎におりますため、十分お役目を果たせるかどうか不安ですが、できる限り、尽くしてまいりたいと存じております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

田崎勝也（フェリス女学院大学）

こんにちは！ この度新理事に就任いたしましたフェリス女学院大学の田崎勝也です。昨年は1年間の特別研修を頂いてUCLAで勉強しておりました。長短あわせると今回で4回目となった米国留学ですが、前回までのものとは研究内容も留学生活も随分様子が違っておりました。受け入れ先は心理測定や心理統計を専門に研究する部局で（共分散構造分析ソフトEQSを作っているところです）数式が日常の会話で飛び交うようなそんなところでした。また、身分はもはや学生ではなく、滞在期間も1年間という中途半端な長さで、受け入れ先との距離のとり方が意外に難しいと感じました。戸惑いも少なくない研修になりましたが、今回のテーマであった比較文化研究における測定モデルの等価性とその検証法に関しては十分な成果が得られたのではないかと考えております。会員の方々にもお伝えできる機会があればと思っております。今回は新理事として学会誌の編集の仕事を仰せつかりました。学会誌が少しでも良くなるように精一杯努力する所存です。どうぞよろしくお願い申し上げます。

私の提言 第5回

手塚千鶴子（慶應義塾大学）

「提言」というよりは、勝手な独り言、つぶやきとでもいうものを書かせて頂きたい。

社会、言語、心理、コミュニケーション、地域間関係という5つの領域をカバーする本学会だが、その個性は、そうした多領域が横並びに含まれていることではない。それらの領域を超えようとする姿勢を持ちながら、研究対象に文化の視点と関係性の視点から迫ろうとするところにある。つまり静態的な比較文化のアプローチよりは、多様な文化間の、生き生きとし、しかも問題も生じうる相互作用と関係性というダイナミックなプロセスに注目したいのである。関係性のなかでの、かかわり影響しあう側面、つまり広い意味でのコミュニケーションに注目している。

そこには、時間軸での過去、現在、未来とのコミュニケーション、意識と無意識とのコミュニケーション、さらには身体と心や頭とのコミュニケーションも考えられる。これらは実はミクロの個人レベルだけでなく、マクロレベルの研究でも重要となるのではないか。特に三番目の身体と心や頭とのコミュニケーションの重要性は、昨今、「身体知」という概念で、理性や論理優勢、分析重視の頭でっかちな現代人に、身体とのつながりやコミュニケーションの回復を促すことによる新たな知として関心を集めている。演劇による知や臨床の知などともつながる新しい知であり、それを育てる実験的教育が試みられはじめています。

21世紀の変転きわまりないグローバル化の時代が、われわれにつきつける課題を考える時、従来の知のあり方だけに頼っていいのであろうか。新たな多文化関係学の地平を拓こうとするとき、こうした新たな知をこそ、取りこんでいく必要があるのではないか。しかしそれをどう実践するのか、はたと困り私のつぶやきはさらに小さくなる。

地区研究会報告



北海道・東北地区研究会

日時：2006年12月2日（土）

場所：藤女子大学 北16条キャンパス

- (1) 「朝鮮人の満州移民のプッシュ要因に関する一考察」
話題提供者：朴 仁哲氏（北海道大学大学院博士課程後期）
- (2) 「ホロコーストにおける犠牲者間の差異—記憶の所有権をめぐる考察」
話題提供者：千葉美千子氏（北海道大学大学院博士課程後期）
- (3) 「PAC分析の有効性を探る—韓国ドラマ視聴者の心的変容調査を通して」
話題提供者：長谷川典子氏（北星学園大学）

北海道・東北地区では12月2日（土）に2006年度第2回地区研究会をおこなった。参加者は15名であったが、3件の研究報告それぞれに対して活発な議論があり、充実した時間を共有できたと思う。



研究会終了のアナウンスをした後も参加者同士で話が弾み、解散までしばらく時間を必要としたことが印象的であった。

朴氏は、オーラル・ヒストリー調査を重視するという立場から文献資料の調査と平行してインタビュー調査をおこなっており、今回は5月におこなった後者の調査結果を中心に満州への朝鮮移民のプッシュ要因について考察した。朴氏によれば、それは日本の朝鮮・満州における植民地政策と深くかかわっており、具体的には6点の要因があるという。それらは 日本政府や日本人に土地を奪取され、生活が貧しかった、「換位移民」政策で移民せざるを得なかった、差別と圧迫を受けて「亡命移民」とならざるを得なかった、鉄道整備によって満州に渡りやすくなった、

朝鮮人を満州に移住させるのは、日本人より安上がりだった、地政学的な理由（国境を接する北部地域からの朝鮮移民が多かったことから）である。最後に朴氏は、朝鮮人移民1世の高齢化が進む中、調査を急ぐ必要性があること、また、今後の研究課題として移民を受け入れたプール要因についての考察も必要であることを言及された。

千葉氏は、ナチズム第二の犠牲者であり50万人以上の人々が亡くなったというロマ民族のホロコーストをめぐる問題について報告した。ホロコースト研究は、ナチズムの特異性を描き出すことに研究の照準があわせられることによって、最大の犠牲者であったユダヤ人を中心に描かれてきたが、そのことによって非ユダヤ系の犠牲者間にヒエラルキーが生じた。特にロマ民族の人々は、迫害による放浪を余儀なくされた上、偏見と差別の中で生きてきたという歴史的背景もあり、研究の中でいまだに然るべき位置を確保できずにいるという。千葉氏は、ホロコーストの全体像を理解するためには、これまでの研究が照準をあわせてきた多数者集団の合意形成という限定的な枠組みを脱却する必要があること、そして、博物館や慰霊碑など記憶を保存する現場における犠牲者間の差異や差別を丁寧に検証することが重要であると述べた。

長谷川典子氏は、ご自身の研究（韓国ドラマ視聴者の心的変容）を通して、PAC分析の有効性について報告された。PAC分析はいくつの欠点（被験者の負担や時間がかかりすぎることを）を抱えてはいるが、質的研究にありがちな研究者の主観やスキーマにもとづいた判断に影響されにくく、イメージ全体や態度の把握ができるという。参加者の多くはこの分析についての予備知識や経験をもっていなかったが、具体的手順や分析例などを丁寧に示されることによって、PAC分析への理解と関心がおおいに高まった。また、長谷川氏はこれまでの研究成果を踏まえて2006年2月から6月にかけておこなったインタビュー調査の結果を報告された。それによると、ドラマ視聴により韓国や韓国人へのステレオタイプや偏見が減少すると共に一度生起した肯定的なイメージは時を経て維持されることがわかったという。

質的な研究に量的な要素を組み入れて客観性を高めるPAC分析は、多くの研究者にとって朗報といえるもので、異文化コミュニケーションの研究者でおおいに活用されているという長谷川氏の弁は納得がいく。機会があればぜひワークショップ等で教えて頂きたいと思った参加者も多いのではないだろうか。加えて、これまで日本人にとって「近くて遠い国」の印象が強かった韓国が、いわゆる韓流ドラマを通じて心的にも近い国になること、そして、おそらくそれは一時的なものではなさそうだというPAC分析の結果は、メディアの影響力の高さを物語ると同時に、多文化主義の視点に立つ社会の形成におけるメディアの意義を示してくれたように思う。

文責：伊藤明美（藤女子大学）

関東地区研究会

日時：2007年3月24日（土）

場所：慶応義塾大学三田キャンパス

- (1) 「在日ムスリムの生活実態と意識：関東大都市圏における社会調査より 2005/2006
在日ムスリム調査」

話題提供者：店田廣文氏（早稲田大学人間科学学術院）

- (2) 「イスラム、宗教と文化」

話題提供者：澤田達一氏（アフルルバイトセンター）

(1) 店田廣文氏（早稲田大学人間科学学術院）による標記の報告がなされた。報告に先立って、早稲田大学人間科学学術院アジア社会論研究室が2006年8月にまとめた報告書『在日ムスリム調査（関東大都市圏調査第一次報告書）』が聴講者全員に配布された。

報告は、まず、在日ムスリム人口についての概要および在日ムスリムに関する先行研究の紹介から始まった。2006年現在、在日ムスリム人口は、外国籍の人と日本人とをあわせて、約10万人であり、これは日本の全人口の0.08%を占める。在日ムスリムの国籍は、インドネシア、バングラデシュ、パキスタン、イランなどが上位を占める。居住地域は東京など全国の首都圏に集中し、モスクも首都圏を中心に全国に40前後存在する。

外国籍のムスリムの多くは、母国で大学以上の教育を受けた後に来日している。初来日時期は2002年から2005年に集中している。来日理由は、研究・勉強、出張・海外赴任、研修などである。雇用形態としては6割が正規社員であり、滞在年数が10年以上というムスリムも多い。また、来日前と比べて来日後に信仰心が強くなったと答えたムスリムが過半数を占めたことは、ムスリムの日本における生活満足度、日本の生活への適応度がきわめて高いこととあわせて、興味深い。

この調査は、在日ムスリム全体を対象としたものとしては、日本初の調査であり、現在も第二次調査が続行中である。日本において外国人人口に占めるムスリムの割合はまだ小さいが、ムスリムの来日数は21世紀に入って増加傾向にあり、また滞在年数が長くなるにしたがって各地でムスリム共同体が形成されているという。こうした事実を踏まえ、在日ムスリムをめぐる今後の動向を見定める上で、きわめて有意義な報告であった。

文責：大類久恵（城西国際大学）

(2) In *Islam: Religion and Culture*, Mr. Sawata, an Islamic (Shiah) religious leader, explored his perspectives and experiences of Muslims in Japan and gave us a vivid picture of lives of Muslims vis-à-vis Japanese. Having converted to a Muslim and later moved to Iran to study Islam extensively, Mr. Sawata has assisted Muslims residing in Japan for their issues of relocation, marriage and divorce, language and translation as a consultant at AHL_UL BAIT CENTER. His talk deliberately focuses on difference and sameness between Islam and Japanese.

According to Mr. Sawata, there is disjuncture between the idea of Islam and the real people who practice Islam among Japanese people. As much as Japanese people feel that the religion of Islam is so exclusive and intolerant of any other religions, Muslims in Japan equally feel that the ways things are practiced in Japan are quite exclusive and intolerant in their own way. By denaturalizing the idea of “being a Japanese,” Mr. Sawata draws our attention to the fine connection between a religious and cultural practice, and an ethnicity.

As Mr. Sawata’s talk on Islam was a qualitative and comparative account based on personalized experiences, it was informative and instructive. I was particularly interested in the



fact that both Japanese and Muslim tend to blur the boundary between a religious and cultural practice and an ethnicity in a distinctive, yet similar, highly ideological way.

抄訳

澤田氏はご自身の経験と視点から、日本におけるムスリムとしての生活を鮮明に描きだした。イスラム教徒となり、その後イラン留学をされた澤田氏は、アフルルバイトセンターでムスリムたちの日本での生活をさまざまな局面（例：リロケーション、結婚、離婚、言語、通訳など）で支援してこられた。今回の澤田氏の講演は、日本とイスラムの両文化の相違点に着目したものであった。

氏によれば日本人のイスラム教に対するイメージと実際の信者の間には隔たりがある。「われわれ日本人」というようなより基本的、また“常識”概念となるものをさらに吟味してみることにより、日本やイスラムにおいて、宗教、文化習慣、または民族という概念がいかに微妙に連結し、また独自に細分化されているかに気づかされた。澤田氏の個人的体験にもとづいた質的で比較文化的な講演は示唆に富むものであった。私自身は特に、日本人とムスリム、それぞれの宗教・文化的習慣と民族というものの考え方、さらにはイデオロギー的にそれぞれの見解を正当化しているという事実に深い興味を抱いた。

written by Nana Okura
Ph. D. Candidate at Yale University
Visiting Researcher at Sophia University

関西地区研究会報告

日時：2007年3月9日（金）

場所：白頭学院 建国幼稚園、小・中学校

「多文化教育フィールドワーク 韓国系学校（建国幼稚園・小・中学校）授業見学」

3月9日、JR阪和線の杉本町で参加者集合。それから一行は歩いて白頭学院へ向かった。韓国系のこの学校には幼稚園、小学校、中学校、高等学校があり、大学進学は日本、韓国の両方に開かれている。

特色あるこの学校で、どのような教育がなされているのか、訪問し見学させてもらうというのが今回の関西地区研究会の主な趣旨だ。私はその日おこなわれていた授業のなかから小学校の日本語と中学校の英語の時間を見学させてもらった。

印象に残ったのは、先生たちが楽しそうに韓国語、日本語、英語の3カ国語を操っていること。ごく自然に3つの言語が口をついて出てくるという感じだった。「Now, where do you think she went? はい、誰か分かる人いますか？（韓国語で聴きとれませんでした）」こんな調子なのだ。勉強としてそうしているという堅苦しさはなく、日常の一部のように3カ国語が授業風景のなかに溶け込んでいる。こういう自由闊達な授業のあり方もあるのかと少し新鮮な驚きを覚えた。

先生たちが自然体でいるためか、生徒さんたちの表情がまた生き生きしているのが心に残った。なにせ物怖じしていない。廊下ですれ違っただけの私たちに、何人もの生徒さんが「こんにちは」と言ってくれる。授業のなかで間違っただけの答えであろうが堂々と手を挙げて発言している。先生と茶目っ気のあるやりとりを楽しんでいる。ああ、いい空気だなと思った。そして考えさせられた。

言語の知識や異文化の理解を学問として教える以前の、人としての素養の基本的なことが、こ

の学校の教育にはあるのではないかと。生徒さんたちが等身大の自分でいられて、学びたいから学ぶという雰囲気。日本文化のなかにあって、韓国人としての民族アイデンティティに誇りを持ちながら柔軟に言語や文化に向き合っていこうとするスピリット。学ぶ者をのびやかな姿にさせる何かを垣間みることができた。いい刺激をもらったフィールドワークだったと思う。

文責：今井千景（大阪大学）

九州地区研究会報告

日時：2007年3月27日（火）

場所：九州大学六本松地区キャンパス

- (1) 「福岡県における託児所付き日本語教室の現状と課題」
話題提供者：松本有希子氏（九州大学比較社会文化学府修士課程）
- (2) 「国際遠隔教育における多文化関係性：ESD概念を通して」
話題提供者：小林登志生氏（メディア教育開発センター教授）

(1) 福岡県の外国人登録者数は全国順に見ると13位だが、在留資格において興行ビザで滞在している人が多く、この資格者数で見ると全国で5位である。また、女性のほうが男性の滞在者数より3500人程多く、年齢層では20～34歳の比較的若い人々がそのうちの45%を占める。外国人の親の多くは日本語の会話はできるが、読み書きのできないケースが多い。このような状況のもとでは外国人滞在者の日本語教育のニーズが存在する。しかし福岡県には託児所付きの教室は49のうちの7つしかない。松本氏は福岡県のこのような現状を踏まえて、外国人女性への支援、DV被害の防止という観点から、就学前児童の託児所付き日本語教室における教師や母親へのインタビューを通して、彼女たちの子供の教育などについての考え方を調査した。本発表においては、調査をおこなった福岡県の5つの託児所付き日本語教室について調査報告がなされた。全国的には親子が同じ部屋で学習するというケースが多く、そちらのほうが望ましいが、福岡の託児所付き日本語教室は、制約条件によって親子別室が多い。また、日本語教師の資格を持った先生の数も十分ではない、教師と託児所スタッフの連携がなされていない、という問題もある。日本語教室は日本語を教えるだけの場ではなく、外国人の母親同士のコミュニケーションの場や「オアシス」として機能しているということや、親は自分の日本語能力の不十分さゆえに、子供には日本語の能力をつけて欲しいという期待が抱かれていることも報告され、最後に福岡県はより積極的な外国人支援をおこなっていくべきではないかという提案がなされた。

松本氏の発表は、ビデオによる託児所付き日本語教室の紹介や、外国人の母親の心境などの報告が印象に残った。

(2) グローバリゼーションの流れの中で、デジタル化・情報化が進行し、同時に遠隔教育の可能性も高まってきた。これまで教育のグローバル化や国際遠隔教育におけるe-Learningの必要性が叫ばれてきたが、そこには、技術、経済、制度における制約が存在する。また、そこにはデジタル・デバイドといわれるデジタル環境のインフラの欠如や不公平さなどの問題と共に、欧米の主導によって生じる英語中心の通信環境などの文化帝国主義の危険性もある。ESDとはEducation for sustainable developmentのことである。国連のユネスコはこのESD、すなわち持続可能な成長のための教育の実現を目指しているが、ESD概念登場の背景には特に環境問題への危機感の高まりがある。しかし今日のグローバル時代においては、環境問題にとどまらず、食料、人権、平和、エネ

ルギー、ジェンダー、多文化共生についての教育が求められており、ESDには、これらの要求に包括的に応えることが期待されている。その一方で、ESDが欧米の先進国先導でおこなわれることに対して、途上国には過去の植民地・環境破壊による疑念も存在する。今後このESDの構想を実現していくためには、エリートの独占などの人的・構造的障害を取り除き、受益者のニーズに見合ったものにする、過去のユネスコのプロジェクトの成功例を踏まえ、域内での連携を強めるなど、その理念を合理的に実現するための課題が存在する。しかし他方で、欧米先進国がこの構想を主導しつつ、欧米の文化帝国主義に陥らずに少数派の文化的独自性が保持されることも、同様に課題として認識されなければならない。

小林理事のESD概念と遠隔教育についての講演は、国連が環境問題と共に多文化共生についてもその重要性を認め、包括的な実行案として議論をおこなっているという事実の紹介が大変興味深かった。たしかにESD概念は包括的であるがゆえに、その概念の構成要素であるジェンダーや基本的人権の尊重と各文化の固有性の尊重・維持との整合性について論争が生じる可能性はある。しかし、この問題については政治理論の分野において、寛容の限界や反リベラリズムへの対応というテーマで論争がなされてきたことであり、今後このような国連の実践的な構想の議論にも、政治理論の成果の導入が期待されるということの意味しているものと思われる。今回が九州地区の第一回目の研究会ということであり、私にとって初めての多文化関係学会の会合への出席であったが、全体として学ぶことが多く、とても有意義な研究会であった。

文責：石松弘幸（福岡大学）

地区研究会のご案内

2007年度第1回関東地区研究会 研究会テーマ「ヴェトナム文化を考える・語る」

日時：7月21日（土）14：00～17：00

場所：慶應義塾大学三田キャンパス 313教室

「ハノイの路地のエスノグラフィー：動きながら関わりながら識る異文化の生活世界」

話題提供者 伊藤哲司氏（茨城大学人文学部人文コミュニケーション学科 教授）

「ヴェトナム人の多文化接触：メンタルヘルス概念と女性の通過儀礼の変容」

話題提供者 鶴川晃氏（武蔵野大学人間社会・文化研究科博士課程院生）

連絡先：手塚千鶴子（慶應義塾大学）ctezuka@ic.keio.ac.jp

2007年度第1回関西地区研究会

日時：2007年7月7日（土）14：00～17：00

場所：関西学院大学大阪梅田キャンパス 1003教室

「中国人と付き合う—大学交流の現場から見る—（仮題）」

話題提供者 三宅亨氏（桃山学院大学）

「『異文化』から『多文化』へ—日本における対外国人コミュニケーションの諸相—」

話題提供者 テーヤ・オストハイダー氏（近畿大学）

連絡先：金本伊津子（平安女学院大学）kanakana@heian.ac.jp

2007年度 第1回北海道・東北地区研究会 研究会テーマ「北海道における多文化関係」

日時：2007年7月14日（土）15：00～17：30

場所：藤女子大学 北16条キャンパス 751教室

「タイトル未定」（アイヌ民族と文化に関連する講演）

話題提供者 藤村和久氏（北海学園大学）

「タイトル未定」（北海道在住外国人支援の実践報告）

話題提供者 多文化共生グループSKY

連絡先：伊藤明美（藤女子大学）itoakemi@fujijoshi.ac.jp

お知らせ



学会誌『多文化関係学』第3号発刊について（学会誌編集委員会）

我が学会の顔である『多文化関係学』も第3号を無事発行することができました。数多い投稿原稿の中から論文7編・研究ノート4編が厳しい査読を通り掲載されることとなり、内容もますます充実してきました。また、第3号は、英文の論文が2編、研究ノートが1篇掲載され、国際色も豊かになってきました。2007年4月30日の第4号の投稿締め切りにも多数の原稿が寄せられ、編集委員会一同、大変喜んでおります。会員の方々には学会誌一部は無料で配布されますが、二部以上を希望される会員の方、また、会員の方が所属する機関で購入される場合は、一部2000円（送料別）の特別価格で提供しておりますので、ご希望の方は学会事務局までお申し込みください。多様な文化の相互作用およびその関係性を多面的かつ動的に捉え、多文化関係学の構築と発展に寄与する研究成果の公刊を目的とする『多文化関係学』、これからも学会の発展とともに『多文化関係学』も更に内容の濃いものとしていきたいと思っております。今後とも、会員の皆様の暖かいご理解とご支援、そして何よりも学術論文の積極的なご投稿により『多文化関係学』の発展と活性化にご協力賜りますようお願い申し上げます。

文責：青木久美子（メディア教育開発センター）

多文化関係学会ホームページについて（ウェブ委員会）

多文化関係学会のホームページを2007年4月にリニューアルいたしました。今回の大きな変更点は、学会員専用サイトにおける登録情報を会員ご自身で修正できるようになったことです。まずは、ご自身のパスワードを覚えやすく他人に推測されないものに変更をお願いします。

会員情報のE-mailと住所については、学会の大会案内や研究会案内等や学会誌を送付する際にたいへん重要ですので、必ずご自身で登録情報をご確認の上、変更があった場合には、そのつどご修正下さい。特に、現在E-mail未登録の方が多く、学会のさまざまな重要情報は会員のE-mailアドレスへ流していますので、未登録の方はぜひ登録して下さい。さらに、本年度4月より、ご所属が変更（学生会員から正会員、勤務先変更等）になった方も、新しいご所属とご住所を登録していただければ幸いです。登録情報はしても非公開欄にチェックがある場合は、公開されませんのでご安心下さい。なお、当ホームページでご自分の学会費支払い状態の確認もできます。

また、大会や研究会に関するご質問やご要望が等ありましたら、学会員専用サイト中ディスカッションボードの地区研究会等のお知らせや自由投稿などへお気軽にご投稿下さい。学会員専用サイトは、多文化関係学会のホームページ（<http://www.js-mr.org/>）からリンクされています。ホー

ムページに関するご意見・ご質問等ありましたら、河野宛(kono@rikkyo.ac.jp)までご連絡下さい。

文責：河野康成（立教大学リーダーシップ研究所）

理事・監事選挙報告（選挙管理委員会）

2007-2008年度の「理事および監事選挙」が2007年1月から3月にかけておこなわれました。16名から成る理事会のうち、5名は2005-2006年度理事互選による選出、9名は全会員からの投票による選出、残る2名はこれら選挙によって選出された14名の新理事による委嘱、といった方法でおこなわれました。結果は次の通りとなりましたのでお知らせします。尚、理事への選出過程で辞退された方は林吉郎、小林登志生、御手洗昭治の3氏で、監事への選出過程で辞退された方は林吉郎、小林登志生、岡部朗一、和田純の4氏でした。（以下、氏名はあいうえお順、敬称略）

<理事> 青木久美子（メディア教育開発センター） 磯崎京子（早稲田大学） 伊藤明美（藤女子大学） ジョン・イングルスルド（明星大学） 抱井尚子（青山学院大学） 金本伊津子（平安女学院大学） 久保田真弓（関西大学） 久米昭元（立教大学） 河野康成（立教大学リーダーシップ研究所） 小松照幸（名古屋学院大学） 清ルミ（常葉学園大学） 田崎勝也（フェリス学院大学） 手塚千鶴子（慶応義塾大学） 細川隆雄（愛媛大学） 灘光洋子（成蹊大学） 松田陽子（兵庫県立大学）

<監事> 石井敏（独協大学） 岩男寿美子（武蔵工業大学）

尚、これまで継続されている顧問と特任理事に加え、2007年3月の理事会で新たに林吉郎氏が顧問に選ばれました。現顧問および特任理事は以下の通りです。

<顧問> 石井米雄（人間文化研究機構） 林吉郎（青山学院大学）

<特任理事> ヒダシ・ユディット（ブタペスト商科大学）

以上です。会員の皆様、ご協力誠にありがとうございました。

2007年5月 選挙管理委員会（久米・灘光・河野）

新会員募集中！！（広報委員会）

多文化関係学会では、ただいま新会員を募集しています。文化を切り口に国の内外の諸問題を多角的な視点から語り合ったり、学会発表したりしませんか。会員の皆様方、当学会にご関心のある方をご紹介ください。入会方法は簡単です。学会HPにある「入会案内」をクリックし、必要事項を入力するだけです。今、すぐにどうぞ！お待ちしております。

文責：久保田真弓（関西大学）

理事会議事録（抄録）



2006 年度第 3 回

日時：2007 年 3 月 24 日

場所：慶応義塾大学

出席者：(敬称略)磯崎京子<新理事>、金本伊津子、久米昭元、河野康成、小松照幸、手塚千鶴子、灘光洋子、林吉郎、松田陽子

【報告事項】

1. 前回議事録の確認
2. 理事選挙結果について：新理事として、磯崎京子氏、抱井尚子氏、久保田真弓氏、清ルミ氏が確認された。
3. 事務局から会計報告
4. 06年度年次大会と各地区研究会の報告
5. 学会誌3号とニュースレターNo.11の報告
6. Web管理の方法について

【審議事項】

1. 新会長・新副会長選出について
久米理事の新会長就任、松田理事と手塚理事の新副会長就任が満場一致で決定した。なお、林現会長には顧問に就任いただくことが満場一致で決定した。
2. 各理事の担当業務について
 - ・新理事2名の選出を待って、各理事の担当業務を検討する。2008年度大会委員長、選挙管理委員長も選出する。
 - ・企画委員を設置する。企画委員長は灘光理事。学会誌編集委員会に関しては、青木編集委員長に委員選出を一任した。
3. 日本学術会議協力学術研究団体称号付与の申請書を提出することが承認された。
4. 学会誌をアカデミア出版会から発行する案については、予算上の困難から見送ることとした。
5. 学会誌の販売価格について
定価（2000円）と特別価格（1000円、年次大会等での販売）に変更することが承認された。
6. 会員データ管理と発送用ラベル作成について
学会員による個人情報更新システムをもとに、発送用ラベル作成予算が承認された。
7. 07年度大会について
 - ・主催大学の学術後援会基金より助成金30万円の交付が決定した。
 - ・年次大会タイトルを「サステナブルな関係の構築に向けて」とする。
 - ・以下のプログラムが承認された。
 - 10月26日（金）プレカンファランス・ワークショップ：「ケーススタディによる（参加型）多文化社会研究 多様なマイノリティの視点から」
 - 10月27日（土）招聘講演：小倉紀蔵氏「多文化主義と歴史認識」
パネルディスカッション：「文化の関係性をめぐるアイデンティティ再考」
（コーディネーターは八島智子氏）
 - 10月28日（日）オープンフォーラム：「食をめぐる多文化関係」（細川隆雄氏、岸本裕一氏、高橋順一氏、その他1名）
 - ・大会参加費は、会員（3000円）、非会員（4000円）、学生（非）会員（2000円）とし、早期申し込みの場合は500円減額する。懇親会4000円、お弁当1000円とする。
8. その他
 - ・小松理事より、HPの英語化プロジェクトの案が出された。
 - ・07年度理事会開催予定日は、6月17日（日）立教大学、10月26日（金）、3月15日（土）

事務局より

学会員のための
学会活動参加の手引き
諸活動についての情報は、すべて学会ホームページ(HP) www.js-mr.org に
掲載されています。

学会の活動情報と連絡先がこれまで一部不明瞭でしたので、次のようなチャートを作りました。
これにより会員同士の情報交流が活発におこなわれることを期待しております。

活動の種類と概要	対象	連絡・問い合わせ先
1. 学会活動全般について知る [学会の目標、沿革、組織、年次大会・ 地区研究会などの情報、学会誌、ニュー ズレター、ホームページ利用法・学 会費支払い状況などの確認]	会員・非会員	学会広報委員会・ウェブ管理委員会 委員長 河野康成 (kono@rikkyo.ac.jp)
2. 学会誌へ論文等を投稿する	会員のみ	学会誌編集委員会 委員長 青木久美子 (kaoki@nime.ac.jp)
3. 年次大会に参加する	会員・非会員	1. 学会 HP 2. 第6回年次大会については 大会委員長 松田陽子 (matsuda@econ.u-hyogo.ac.jp)
4. 地区研究会に参加する *関東/関西地区は年2回、 その他の地区は年1~2回	会員・非会員	北海道・東北：伊藤明美 (itoakemi@fujijoshi.ac.jp) 関東：手塚千鶴子 (ctezuka@ic.keio.ac.jp) 中部：小松照幸 (komatsu@ngu.ac.jp) 関西：金本伊津子 (kanakana@my.heian.ac.jp) 四国・中国：細川隆雄 (hosokawa@agr.ehime-u.ac.jp) 九州：松永典子 (mnori@scs.kyushu-u.ac.jp)
5. 学会費の支払い状況を確認する *会員番号とパスワードが必要	会員のみ	1. ウェブ管理委員長 河野康成 (kono@rikkyo.ac.jp) 2. 事務局長 小松照幸 (komatsu@ngu.ac.jp)

編集部より

お詫び NL10号における昨年の年次大会特集の記事で招聘講演者である帝塚山学院大学の米田伸次先生のお名前およびご所属の記載に誤りがありました。米田先生はじめ諸先生方には多大なご迷惑をおかけしました。衷心よりお詫びして訂正させていただきます。

編集後記 早いものでニュースレター委員会が新体制となってから3回目のNL発行となりました。これは一重に会員の皆様方のご協力によるものです。ありがとうございました。これからも委員会は鋭意努力して参る所存です。どうぞよろしくお願い致します。

(NL委員会：伊藤明美、生越秀子、徳井厚子)